

アートと地域の協働：
静岡県立美術館ロダン館での音楽活動を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学ピアノとウェルビーイング研究所 公開日: 2024-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 友香理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000580

アートと地域の協働 —静岡県立美術館ロダン館での音楽活動を通して—

後藤 友香理

1. はじめに

アートマネジメントとは「アートを社会で生かしていくこと」であり、そこにはアーティストが作品を自由に表現する環境を整えるプロセスと、作品として表現されたものを広く社会へ還元していくプロセスが存在するという（林 2004: 1）。つまり、アートマネジメントの効果を測るには、単にアートが地域どの程度還元されたかだけでなく、アーティストがアートを自由に表現し、自らの活動の意味や価値を理解してもらう場が与えられたか、という観点からの評価も必要である。しかし、地域とアートの関係を考える上で、アートが「地域活性化の為の道具に成り下がっていきこうとしている」（中村 2014: 72）など、アートの手段化を危惧する声もあがっている。目指すべきは、アートによって地域が活性化するだけでなく、地域との接点の中でアーティストやアート自体もまた豊かになり、地域の持っている資源と結びつくことでそこに新しい価値や創造活動が生まれることではないだろうか。

本稿は、静岡県立美術館ロダン館を舞台として 2014 年から筆者が行ってきた音楽活動（以下、ロダン館音楽活動と記す）を、目指すべき地域におけるアートマネジメントの視点から評価するものである。静岡県立美術館は静岡市に位置する美術館であり、県議会 100 年記念事業の一環として 1986 年に設立された。1994 年に新館としてオープンしたロダン館では、A. ロダンの《地獄の門》を中心とする 32 体の彫刻を鑑賞することができる。ロダン館音楽活動における筆者は、アートを生み出す個人であり、楽曲や彫刻作品を、演奏を通して社会に伝える者でもあり、コンサートの企画運営を通じて地域とアートを繋ぐ者でもあった。この実体験をアクションリサーチとして振り返りながら、本活動における地域とアートの関わりの様相やその成果・課題を検討する。

2. 静岡大学アートマネジメント力育成事業

ロダン館音楽活動は、文化庁助成による静岡大学アートマネジメント力育成事業（以下、アートマネジメント事業と記す）の一環としてスタートし、2016 年に助成事業が終了して以降も、静岡県立美術館との協力関係のもと活動を継

続している。まずは、活動の発端となったアートマネジメント事業の概要を振り返り、そこでどのようなことが意図されていたのかを探る。

この事業は「大学等の有する教員、教育研究機能、施設・資料等を積極的に活用」し、「アートマネジメント人材育成を通じて地域の文化芸術での活性化を行おうとするもの」であった（静岡大学アートマネジメント力育成事業事務局 2016: 2）。主たる対象者は、地域の文化施設に勤務する職員であり、学校教員や文化芸術に関心を持つ市民、学生なども受講生に加えることで新たな交流の場となることを目指した。また、アートマネジメントにおける人材の養成・能力開発を中心に置きつつも、アートマネジメントにおけるガバナンスおよび市民が自らの地域に誇りを持つシビックプライドの喚起もビジョンとして構想されていた。講義（アートマネジメントに関する知見を習得する）、演習（ワークショップや鑑賞）、実習（コンサート、展覧会、舞踊・演劇公演の企画・運営に参加する）のプログラムから成り、静岡大学の教員陣および静岡県舞台芸術センター（SPAC）や静岡県立美術館をはじめとする近隣文化芸術機関と連携して進められた。こうした連携を発展させることで、取り組みが助成期間だけの一過性のもので終わるのではなく、地域に存在・潜在する有形・無形の文化資源を活性化する事業の継続が期待されていた。

このように、アートマネジメント事業は大きな理念を携えてスタートした。特徴として挙げられるのは、地域の文化施設に勤務する職員や学生など、今後地域の文化芸術の担い手となる者を対象としていたこと、地域の文化芸術機関と積極的に連携を取って進められたこと、そして、地域に暮らし、活動している人が誇りを持つことで成熟社会の実現を目指そうとしていたことである。事業実施に際し、市民（県民）に開いた目玉企画として事業2年目（2014年）に構想されたのが、ロダン館でのコンサートである（表1¹参照）。

ロダン館コンサートは事業のプログラムの中では実習の一つとして位置づけられ、コンサートができあがるまでの一連の作業を受講生が把握し、その一部を実際に体験することでアートマネジメント能力を高めるという目的が設定されていた。公演タイトル「Rodin inspires Composers ～音になった彫刻～」が示す通り、作曲家へロダン館に展示されているロダン作品にインスピレーションを得た曲を依頼し、それをロダン館の中で初演するという極めて斬新なコン

¹ 本稿の終わりに、これまでのロダン館音楽活動を一覧にして掲載している（表1および表2）。

セプトを持っていた。このコンセプトは、以後のロダン館音楽活動にも引き継がれ、活動の核となっていく。

コンサート発案者は、静岡大学人文社会科学部客員教授（当時）でアートマネジメント事業の中心人物でもあった平野雅彦氏であるが、このようなコンサートが成立したのは、静岡県立美術館との協力関係があったからだと言う。事業に先立ち、平野氏が静岡大学人文社会科学部で担当していた「比較言語文化各論Ⅰ」の授業の中で、静岡県立美術館での「ギャラリートーク」という活動が行われていた。学生がロダン館の作品を一点選び、最終的にロダン館で作品解説や朗読などのパフォーマンスを行なうもので7年間にわたって実施された。このように、大学と県立美術館の間にすでに一定の協力関係が築かれ、美術と他ジャンルのコラボレーションも試みられていた、という背景があったことで、ロダン館コンサートのアイディアが生まれたと考えられる。

コンサートはロダン館 20 周年記念事業として県立美術館が開催したロダンウィークに合わせて 11 月に行われ、作曲は静岡大学教育学部の教員である長谷川慶岳氏と当時芸術文化課程に所属していた作曲専攻の学生たち、演奏は同じく教員である筆者とピアノ専攻の学生たちによって行われた。アートマネジメント事業の受講生はリハーサル見学、会場設営、当日の運営などを行った。ここで演奏された曲目は、ロダンの「永遠の休息の精」、「地獄の門」、「フギット・アモール」、「バッカス祭」、「ヴィクトリア・アンド・アルバートと呼ばれる女のトルソ」、「バラの髪飾りの少女」を題材としており、来場者はロダンの彫刻作品に囲まれながら、その空間で生まれた楽曲の初演に立ち会うという先例のない経験をした。受講生にとっては、音楽ホールではない会場で行われるコンサートの開催に必要なノウハウを学ぶ機会になり、作曲・演奏をした学生にとっては、自らの表現を発表する場となった。

静岡県立美術館はロダンウィークを例年事業として定着化し、それに伴い当初 1 回の予定であったロダン館でのコンサートも、翌 2015 年に引き続き開催された。作曲家へ、ロダンに因んだ新曲を依頼するというコンセプトはそのまま継承されたが、第 2 回は演奏だけでなく、「比較言語文化各論Ⅰ」の受講生であった学生による朗読が演奏の合間に挿入されるなど、他ジャンルとのコラボレーションがより強化され、学生だけでなく地域の作曲家（渡会美帆氏）も作曲に加わるなど全体的な広がりが見られた。

次節では、アートマネジメント事業終了後、ロダン館でのコンサートがどのような形で継続し発展したかを追う。

図 1 公演チラシ（2014 年および 2015 年）



3. アートマネジメント事業後

① ロダンウィークでのコンサート

前述の通り 2015 年でアートマネジメント事業の助成が終了し、ロダン館でのコンサートも 2 回で終了するかと思われた。しかし、関係者の働きかけにより 2016 年のロダンウィークでもコンサートが行われることとなった。そして、その成功により、以後ロダンウィークのレギュラーイベントとして定着し現在に至っている。

アートマネジメント事業の手を離れるにあたって、いくつかの点で方向転換が行われた。一つは、コンサートの企画運営の大半が、演奏を行う筆者および作曲者の長谷川氏に委ねられたとことである。これまでのように、運営に際し事業の受講生の手を借りることができなくなり、アーティスト自身が美術館側とより緊密に連携しながら企画や運営を担う形となった。企画に関する唯一の制約は、美術館からの「ロダンに何らかの形で関連するテーマでコンサートを企画してほしい」という要望であり、以後様々な角度からロダンにまつわるテーマを模索することになる。二つめは、学生による作品・演奏がなくなったことである。2015 年に静岡大学教育学部の芸術文化課程が募集停止となり、作曲やピアノ演奏を専門とする学生がいなくなったことから、学生による作品・演奏が現実的に難しくなった。学生の発表の機会は失われる形となったが、その代わりに地域の様々なアーティストとの共演やコラボレーションが生まれ、コンサートのバラエティや内容は充実した。これまでにフルート、サクソフォン、

ヴァイオリン、声楽との共演のほか、朗読、映像、衣装とのコラボレーションも行われた（表1参照）。その中で、ロダンをモチーフにした新曲の委嘱は引き続き行われ、長谷川氏による新曲が毎回提供された。

ロダン館コンサートにおける新曲は、彫刻からインスピレーションを得ているという点で彫刻作品の二次創作であり、それを演奏しコンサートとして構成する行為は三次創作と言える。ロダンの作品をどのように二次・三次創作として変換させ再解釈するか。ロダンという「お題」からどれだけ多様なアイデアを創出し、美術館という空間をどのように生かすことができるか。ロダン館でのコンサートは、アーティストたちによる様々なクリエイティビティが試され発揮される場となった。

②ロダンウィークから展開された活動

このような試みが蓄積される中、ロダンウィークの枠を飛び越えて実施された活動もある（表2）。2021年12月のコンサート「目で見える音楽 耳で聴く音楽 ～ロダンとフランス音楽のひととき～」、2022年9月のコンサート「ロダンと表現者たち ～音と言葉で織りなすロダンへのイマージュ～」、そして同年10月に発表されたCD『ロダンをめぐる8つのイマージュ 長谷川慶岳作品集』（ECL102）である。これらが実施された遠因となったのは、2021年9月からの半年間、ロダン館が設備改修工事のため休館となりこの年のロダンウィークが行われなかったことなどがある。しかしより直接的なきっかけは、2014年から続いてきた試みをさらに広く伝えたいという思いが、これまで関わってきたアーティストたちの間に醸成されたためである。県内のアーティストや市民による任意団体「静岡ミュージッキング・ラボ」が立ち上がり、これらの活動が展開された。

コンサート「目で見える音楽 耳で聴く音楽 ～ロダンとフランス音楽のひととき～」（会場：札ノ辻クロスホール）は、ピアノと木管五重奏の演奏が、映像や即興的なリキッドライティングの演出と同時に展開されることによって、聴覚と視覚が互いに触発されることを狙いとしたコンサートであるが、コンサート前半に、長谷川氏の楽曲の演奏に合わせてロダン館で撮影した映像を会場内のスクリーンや壁に投影し、音楽を通じた彫刻作品の普及につなげた。

コンサート「ロダンと表現者たち ～音と言葉で織りなすロダンへのイマージュ～」は、ロダンウィーク期間外にロダン館で行われた公演であり、普段見ることのできない夜のロダン館を会場とした。公演タイトルには、作曲家と演

奏家、詩人と俳優などそれぞれのジャンルの表現者たちが、ロダンの世界に挑み表現するというコンセプトが込められており、演奏と SPAC 俳優によるパフォーマンスとの共演が行われた。

ロダン館で生まれた楽曲を、さらに広く伝え、形に残そうとする活動も行われた。これまで作曲・初演されてきた長谷川氏の楽曲を取めた CD『ロダンをめぐる 8つのイメージ 長谷川慶岳作品集』である。ロダン館特有の音響を生かすため、収録はロダン館で行われ、そのコンセプトや音質は音楽・オーディオ雑誌で高い評価を得た。

これらはいずれもロダンウィークとは別個の活動であり、アーティスト自身が行政や法人の助成金を得るなど、積極的な働きかけによって実現したものである。アートマネジメント事業の一つとして始まったのち、ロダンウィークのレギュラーイベントとして定着したロダン館音楽活動を、今度はアーティスト自身が自らにとって重要な芸術活動と価値づけ、積極的に関わっていく過程を見ることができる。

4. ロダン館音楽活動と地域

アートマネジメント事業の一環として行われた公演は、ロダン館コンサートの他にも展覧会、ダンス公演、静岡音楽館 AOI での音楽公演などがあつた。中でも展覧会「めぐりアート静岡」²は 2013 年に始まり、事業期間終了後は静岡市の主催により継続されたが、2020 年を最後に終了している。そのような中で、ロダン館音楽活動がここまで継続できた要因はどこにあるだろうか。

実は、美術館でコンサートを行うこと自体はさほど珍しいことではなく、展示された作品と同時代に書かれた音楽作品とを合わせて館内で鑑賞するイベントは比較的好く行われている。しかし、こうした美術館コンサートは、展示室の音響や広さの問題から、展示室とは異なる館内の別会場で行われることも多い。「美術館が作曲家に楽曲を委嘱し、作品の立ち並ぶ空間で初演する」という他に類を見ない取り組みが成立し継続してきた大きな要因として、ロダン館がユニークベニューとしてうまく働いたことが挙げられる。

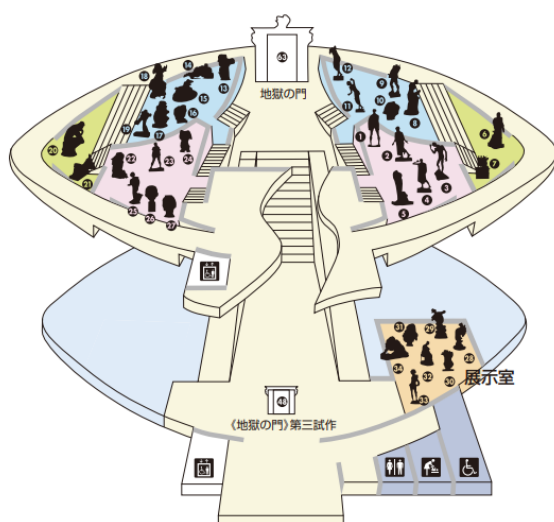
文化庁によるとユニークベニューとは、本来の用途とは異なるニーズに応じて特別に貸し出される会場のことであり、歴史的建造物や神社仏閣、城跡、美術館、博物館等の独特な雰囲気を持つ会場イベント等を実施することにより、

² 「めぐりアート静岡」については、ウェブサイト「めぐりアート静岡 2020」
<https://megururi.net/8th/>などを参照。

特別感や地域特性を演出することを目的としているとされる（文化庁地域文化創生本部 2019:5）。

ロダン館の、ドーム型の高いガラス天井は響きが長く、音があちこちに反射して独特な音響効果を持っている。また、見晴台のような2階のエントランスフロア、左右のウイング、そして階段状のスキップフロアは、それぞれ2階席、バルコニー、舞台、のように劇場に見立てて使用することも可能である(図2)。

図2 ロダン館の地図³



2017年のコンサートでは、中央に配置された「地獄の門」を囲むように、曲に合わせた映像を壁に大きく映写し、彫刻と映像、音楽のコラボレーションを行った。聴衆からは「地獄の門が普段とは違う見え方がした」といった感想があり、これまでのロダン館の空間を「異化」した、新たな作品鑑賞を促す機会となった(図3)。2018年には、フルート奏者が中央の舞台のほかテラスからも演奏し、音

響面で新たな方法が開拓された。2019年には、中央に接続する両脇階段もステージの一部として取り込み、ロダン館を歌劇場のように使用した。このようにロダン館は、コンサートを行う会場としても多くの可能性を秘め、かつアーティストたちの様々なアイディアによってその可能性が引き出されてきた。

³ ロダン館ガイドブック

(https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp/pdf/exhibition/rodin/RodinWingGuidebook_ja.pdf) より転載。

図 3 2017 年のコンサートの様子



表 1、表 2 にはそれぞれの公演の入場者数が記載されている。年によってばらつきがあり、コロナ下で行われ入場制限を行った公演もあるものの、これまでのコンサート来場者は延べ 1979 人であり、ロダンの彫刻作品とアーティストのアートが結びつくことによって、ロダンの彫刻をこれだけ多くの鑑賞者へ届けたことになる。リピーターも多く、ロダンウィーク中にコンサートを聴くことが市民に定着しつつある。2021 年 12 月に行われたコンサート「目で見える音楽 耳で聴く音楽」での来場者アンケートには「こんな素晴らしい美術館や作品が自分の街にあることを誇りに思う」といった感想があり、この活動を通して人々が地域の文化資源に親しみ、誇りを持つ様子を確認することができた。

他方、アーティストにとっても、ロダン館音楽活動は自身の活動にプラスに働いてきた。アーティストが自身の表現手法を試す場としてだけでなく、アートマネジメントを実践する場としても機能し、地域の持っている人的・物的資源と結びついて、新たな創造活動が生まれるきっかけとなった。アーティスト自身が継続的に関わりたいと願う活動であったことこそ、ロダン館音楽活動が継続できたもう一つの要因であると考えられる。

5. まとめ

2014 年から行われてきたロダン館音楽活動について、地域におけるアートマネジメントの視点から論じてきた。その結果、本活動におけるアートマネジメントの成果として次の 3 点を挙げるができる。①地域の文化資源がアートの

ィストのアートと結びつくことによって、地域の文化資源を新たな鑑賞者へ届け、新しい鑑賞の可能性を引き出したこと。②アーティスト自身が自らの表現を深め、活動を展開していくきっかけとなったこと。③これらの創造行為によって、シビックプライドの醸成に貢献したこと。これらのことから、ロダン館音楽活動は、アートによって地域が活性化するだけでなく、地域との接点の中でアーティストやアート自体もまた豊かになり、地域の持っている資源と結びつくことでそこに新しい価値や創造活動を生むアートマネジメントとして評価できる。

ただし、本活動はまだ継続中であり、これらの成果も暫定的である。今後の活動が表現としてマンネリ化していかないか、減り続ける予算の中でどのように活動を充実させていけるか等の懸念材料もある。また、本稿はコンサートという音楽活動自体に焦点をあてた検証であるために、より広い範囲のアウトカムとしてアートがどの程度地域に還元されたのかという視点においては、考察や検証が不十分であるといえよう。今後の課題としたい。

【文献】

- 静岡県立美術館（2015）『平成 26 年度静岡県立美術館年報』静岡県立美術館
静岡県立美術館（2016）『平成 27 年度静岡県立美術館年報』静岡県立美術館
静岡県立美術館（2017）『平成 28 年度静岡県立美術館年報』静岡県立美術館
静岡県立美術館（2018）『平成 29 年度静岡県立美術館年報』静岡県立美術館
静岡県立美術館（2019）『平成 30 年度静岡県立美術館年報』静岡県立美術館
静岡県立美術館（2020）『令和元年度静岡県立美術館年報』静岡県立美術館
静岡県立美術館（2021）『令和 2 年度静岡県立美術館年報』静岡県立美術館
静岡県立美術館（2022）『令和 3 年度静岡県立美術館年報』静岡県立美術館
静岡県立美術館（2023）『令和 4 年度静岡県立美術館年報』静岡県立美術館
静岡大学アートマネジメント力育成事業事務局 編（2016）『地方総合大学からの文化力発信プロジェクト：アートマネジメント力育成による地域の文化芸術力活性化に向けて：アートの力で、わたしが変わる。地域が変わる。：平成 25-27 年度報告書』静岡大学
中村葉子（2014）「なぜアートはカラフルでなければいけないのか —西成特区構想とアートプロジェクト批判」『インパクション』195、pp.70-76
林容子（2004）『進化するアートマネージメント』レイライン

文化庁 地域文化創生本部 編（2019）『文化財を活用したユニークベニユー
ハンドブック』文化庁 地域文化創生本部

【ウェブサイト】

静岡県立美術館「ロダン館ガイドブック」

https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp/pdf/exhibition/rodin/RodinWingGuidebook_ja.pdf（2024年3月10日）

表1 ロダンウィーク会期中のコンサート

	日時・ 会場・入場料	タイトル	出演者	曲目	概要
1.	2014年 11月2日 13:30～ 静岡県立美術 館ロダン館 300円 (入館料)	Rodin inspires Composers ～音になっ た彫刻～	ピアノ/ 後藤友香理 小澤実々子 鈴木佑 児玉恭子 小島歌織子 森角敦 笹瀬奏子	◇長谷川慶岳/ バラの髪飾りの少 女 ◇田中麻優/生命へ の祈り ◇越岡卓哉/ 地獄の門への前奏 曲 ◇楠本泰周/Fugit Amor ◇加藤真矢子/ L'errance ～彷徨い 人～ ◇亀甲有希子/ Bacchanale ◇柴山いづみ/ Le dos de la belle femme	教育学部学生と 教員によるコン サート。ロダン 館20周年記念 事業としてロダ ンウィークが初 めて開催され た。 主催：静岡大 学・静岡県立美 術館 助成：平成26 年度文化庁大 学を活用した文 化芸術推進事業 入場者数：200 名
2.	2015年 11月3日 13:30～	ロダンを巡 る4つのイ マージュ～	ピアノ/ 塚本品子 小澤実々子	◇渡会美帆/彫刻家 ロダン ◇田中麻優/手	ロダンウィーク が静岡県立美術 館の例年事業と

	静岡県立美術館ロダン館 300円 (入館料)	朗読と音楽 による～	倉嶋知寛 後藤友香理 朗読/ 仁科太一 増田研佑 宮城嶋遥加	◇柴山いづみ/ おどる彫刻たち ◇長谷川慶岳/ 地獄の門の前に立つ	して定着化。 主催：静岡大学・静岡県立美術館 助成：平成27年度文化庁大学を活用した文化芸術推進事業 入場者数：308名（ただし、その後に行われたダンス公演との合算）
3.	2016年 11月5日 14:00～ 静岡県立美術館ロダン館 300円 (入館料)	ロダンを聴く！ ～ピアノと朗読とともに～	ピアノ：後藤友香理 朗読：宮城嶋遥加 テキスト監修/ 安永愛	◇長谷川慶岳/ バラの髪飾りの少女 ◇リスト/物思いに沈む人 ◇長谷川慶岳/波 ◇フランク/ 前奏曲、コラールとフーガ	助成事業期間が終わり、静岡県立美術館主催のコンサートとして開催された。 主催：静岡県立美術館 入場者数：140名
4.	2017年 11月5日 14:00～ 静岡県立美術館ロダン館 300円 (入館料)	ロダンのいたパリ ～音と光のコンサート～	ピアノ/後藤友香理 映像 /OVERHEADS	◇長谷川慶岳/ プロローグ～ロダン館に寄せて～ ◇ドビュッシー/ 水の上の反映、月の光 ◇サティ/ ジムノペディ第1	演奏に合わせて、OVERHEADSによる映像演出が行われた。 主催：静岡県立美術館 入場者数：140

				番	名
				◇ラヴェル／ ソナチネ第1楽 章、亡き王女のた めのパヴァーヌ ◇セヴラック／ 祭～ピュイセルダ の思い出 ◇長谷川慶岳／ エピローグ～「永 遠の休息の精」に 寄せて～	
5.	2018年 11月3日 15:30～ 静岡県立美術 館ロダン館 入場無料	ドビュッシ ーとロダン ～カミーユ が愛した二 人の芸術家 ～	フルート/古川 はるな ピアノ/後藤友 香理 作曲/長谷川慶 岳	◇M.ボニ／ フルートとピアノ のためのソナタよ り 第1楽章 ◇ドビュッシー／ ビリティスの歌よ り 第1,3,4,6曲、 レントより遅く、 亜麻色の髪の乙女 ◇長谷川慶岳／ ドビュッシーを讃 えて～フルートと ピアノのための～ ◇ドビュッシー／シ ランクス ◇フランク／ソナタ イ長調より 第 1,2楽章	会期中、コンサ ートとは別に長 谷川慶岳氏によ るサウンド・イ ンスタレーショ ン「Hommage à Rodin（ロダン を讃えて）」が 同時開催され た。 主催：静岡県立 美術館 入場者数：200 名
6.	2019年 11月4日	ロダンと聴 く、愛と死	ソプラノ/大石 真喜子	◇レオンカヴァッロ ／オペラ「道化	中央に接続する 両脇階段もステ

	14:00～ 静岡県立美術館 ロダン館 入場無料	の物語	バリトン/大石 陽介 ピアノ/後藤友 香理	師」よりトニオの プロローグ“よろし いですか?...よろ しいですか?...” ◇ヴェルディ/ オペラ「シチリア 島の夕べの祈り」 よりエレナのアリ ア“ありがとう、 愛する友よ” ◇長谷川慶岳/ 題名の無い2つの 絵～ピアノのため の～ ◇ヴェルディ/ オペラ「仮面舞踏 会」よりレナート の aria “お前こ そ心を汚すもの” ◇グノー/ オペラ「ファウス ト」より aria “宝石の歌” ◇ヴェルディ/ オペラ「イル・ト ロヴァトーレ」よ りルーナ伯爵とレ オノーラの二重唱 “聞いているな?”	ージの一部とし て取り込み、ロ ダン館を歌劇場 のように使用。 前回に続き、サ ウンド・インス タレーション 「Hommage à Rodin II」が同 時開催された。 主催：静岡県立 美術館 入場者数：210 名
7.	2020年 11月1日 14:00～	パリに吸い 寄せられた 作曲家たち	ピアノ/後藤友 香理	◇サティ/あなたが 欲しい ◇フォーレ/舟歌	エラル社 の 1903年製ピアノ を会場に持ち込

	静岡県立美術館ロダン館 入場無料	～1903年 製のピアノ で聴く名曲 たち～		第1番 ◇ドビュッシー／ 前奏曲集 第1集 より〈亜麻色の髪 の乙女〉、〈沈める 寺〉 ◇長谷川慶岳／ソナ チネ ◇プーランク／メラ ンコリー ◇グラナドス／ スペイン舞曲集 Op.37より〈アン ダルーサ（祈 り）〉 ◇ファリャ／ スペイン舞曲第1 番	み、演奏。 サウンド・イン スタレーション 「Hommage à Rodin III」が同 時開催。 主催：静岡県立 美術館 入場者数：170 名
8.	2022年 11月5日 (土) 14:00～ 静岡県立美術館ロダン館 入場無料	リコーダー とサクソフ ォンでめぐ るフランス 300年の旅	リコーダー・ サクソフォン/ 長瀬正典 ピアノ/後藤友 香理 作曲/長谷川慶 岳	◇エイク／ イギリスのナイチ ンゲール ◇作曲者不詳／ 『ディオヴィジョ ン・フルート』よ り リュリ「ファ エトン」のシャコ ンヌ ◇クーブラン／恋の うぐいす ◇ビゼー／ 「アルルの女」より 《間奏曲》	会場に電子チェ ンバロを持ち込 み、様々な時代 のフランス音楽 を演奏した。 主催：静岡県立 美術館 入場者数：106 名

				<p>◇長谷川慶岳／ 5つのバガテル</p> <p>◇ドビュッシー／ アラベスク第2 番、水の反映、ヒ ースの茂る荒れ 地、ラブソディ</p>	
9.	<p>2023年 11月5日 (日) 14:00～ 静岡県立美術 館ロダン館 入場無料</p>	<p>奏×装 ～音とロダ ンと装いと ～</p>	<p>ピアノ/後藤友 香理 ヴァイオリン/ 花井悠希</p>	<p>◇クライスラー／ 前奏曲とアレグ ロ、シンコペーシ ョン</p> <p>◇クライスラー＝ラ フマニノフ／ 愛の悲しみ</p> <p>◇ヴィラ＝ロボス／ 黒鳥の歌</p> <p>◇ピアソラ／ アヴェ・マリア (昔々) ナイトクラブ 1960 (「タンゴの歴 史」より)</p> <p>◇ドビュッシー／ 月の光</p> <p>◇マスネ／ タイスの瞑想曲</p> <p>◇サン＝サーンス／ 死の舞踏</p>	<p>衣装デザイナー でもあるヴァイ オリニスト花井 氏をゲストに迎 え、会場内に衣 装を展示。</p> <p>主催：静岡県立 美術館 入場者数：235 名</p>

※『静岡県立美術館年報』（平成26年度～令和4年度）を参考に作成。

表 2 それ以外の音楽活動

種別	日時・会場・入場料	タイトル	出演者	曲目	備考
コンサート	2021年 12月18日 19:00～ 札の辻クロス ホール 3500円（一般）、 1000円（大学生以下）	目で見える音楽 耳で聴く音楽 ～ロダンとフランス音楽のひととき～	ピアノ/ 後藤友香理 作曲/ 長谷川慶岳 アンサンブル・アンスピレ フルート/ 古川はるな オーボエ/ 宮村和弘 クラリネット/ 塚本陽子 ファゴット/ 依田晃宣 ホルン/ 阿部麿 リキッドライティング /OVERHEADS	◇長谷川慶岳/ プロローグ～ロダン館に寄せて～、 バラの髪飾りの少女、地獄の門の前に立つ、ドビュッシーを讀えて、エピローグ～〈永遠の休息の精〉に寄せて～ ◇ラヴェル（I.ファリントン編曲）/ 亡き王女のためのバヴァース ◇ドゥリング／三重奏曲 ◇ラヴェル（M.ジョーンズ編曲）/ クーブランの墓	事前に県立美術館やロダン館の撮影を行った（撮影：株式会社クラフト）。当日は演奏中に会場内のスクリーンや壁に投影することで、音楽を通じた彫刻作品の普及につなげた。 演奏動画は一般公開している。 主催：静岡ミュージッキング・ラボ 助成：文化庁 「ARTS for the Future!」 入場者数：170名

<p>コンサート</p>	<p>2022年 9月24日 18:30～ 静岡県立美術館ロダン館 入場無料（事前申し込み）</p>	<p>ロダンと表現者たち ～音と言葉で織りなすロダンへのイメージ～</p>	<p>ピアノ/ 後藤友香理 チェロ/ 生駒宗煌 朗読/木内琴子 朗読/三島景太 作曲/ 長谷川慶岳 映像 /OVERHEADS</p>	<p>◇J.S.バッハ/ 無伴奏チェロ組曲 第1番より前奏曲 ◇長谷川慶岳/ バラの髪飾りの少女、ソナチネ ◇J.S.バッハ/ 半音階的幻想曲とフーガ ◇ピアソラ/ ル・グランタンゴ ◇カザルス/鳥の歌</p>	<p>SPAC俳優による朗読を交えたコンサート。夜のロダン館で開催された。事前申し込み制としたが、定員の倍を超える申し込みがあった。演奏動画は一般公開している。 主催：静岡ミュージッキング・ラボ 共催：静岡県立美術館 助成：静岡市文化振興財団 入場者数：100名</p>
<p>C D</p>	<p>2022年 10月21日発売</p>	<p>ロダンをめぐる8つのイメージ 長谷川慶岳作品集 (ECL102)</p>	<p>後藤友香理 (ピアノ) 長谷川慶岳 (作曲) 古川はるな (フルート) 宮城嶋遥加 (朗読)</p>	<p>1. プロローグ ～ ロダン館に寄せて～ 2. バラの髪飾りの少女 3. ドビュッシーを讃えて 4. 壺を持つカリァティード 5. ソナチネ 6. 題名のない2つの絵 7. 地獄の門の前に立つ</p>	<p>2022年3月15、16日ロダン館にて収録。 『レコード芸術』、『音楽現代』、『STEREO』、『ステレオサウンド』、『オーディオアクセサリー』の各誌で取り上げられ高い評価を得た。</p>

				8. エピローグ～ 《永遠の休息の 精》に寄せて～	
--	--	--	--	---------------------------------	--

**Collaboration between Art and the Community:
Focusing on Musical Activities
at the Rodin Wing of the Shizuoka Prefectural Museum of Art**

GOTO Yukari

This paper evaluates the author's musical activities at the Rodin Wing of the Shizuoka Prefectural Museum of Art since 2014 from the perspective of arts management in the community. Arts management in a community requires not only assessing the extent to which art is reintroduced to the community but also enriching the activities of artists and the art itself in the process, and fostering the creation of new values and creative activities by integrating them with the cultural resources of the community.

The paper outlines the past music activities and highlights the following three accomplishments of arts management in these activities: (1) By connecting local cultural resources with the artists' art, the community's cultural assets were exposed to new audiences, revealing fresh possibilities for appreciation. (2) Artists themselves were provided with opportunities to deepen their own expressions and expand their activities. (3) These creative endeavors contributed to the cultivation of civic pride.

Considering the above, the musical activities at the Rodin Wing can be assessed as a form of arts management that not only revitalizes the community through art but also enriches both the artists and the art itself through engagement with the community, fostering the creation of new values and creative activities by leveraging the community's resources.